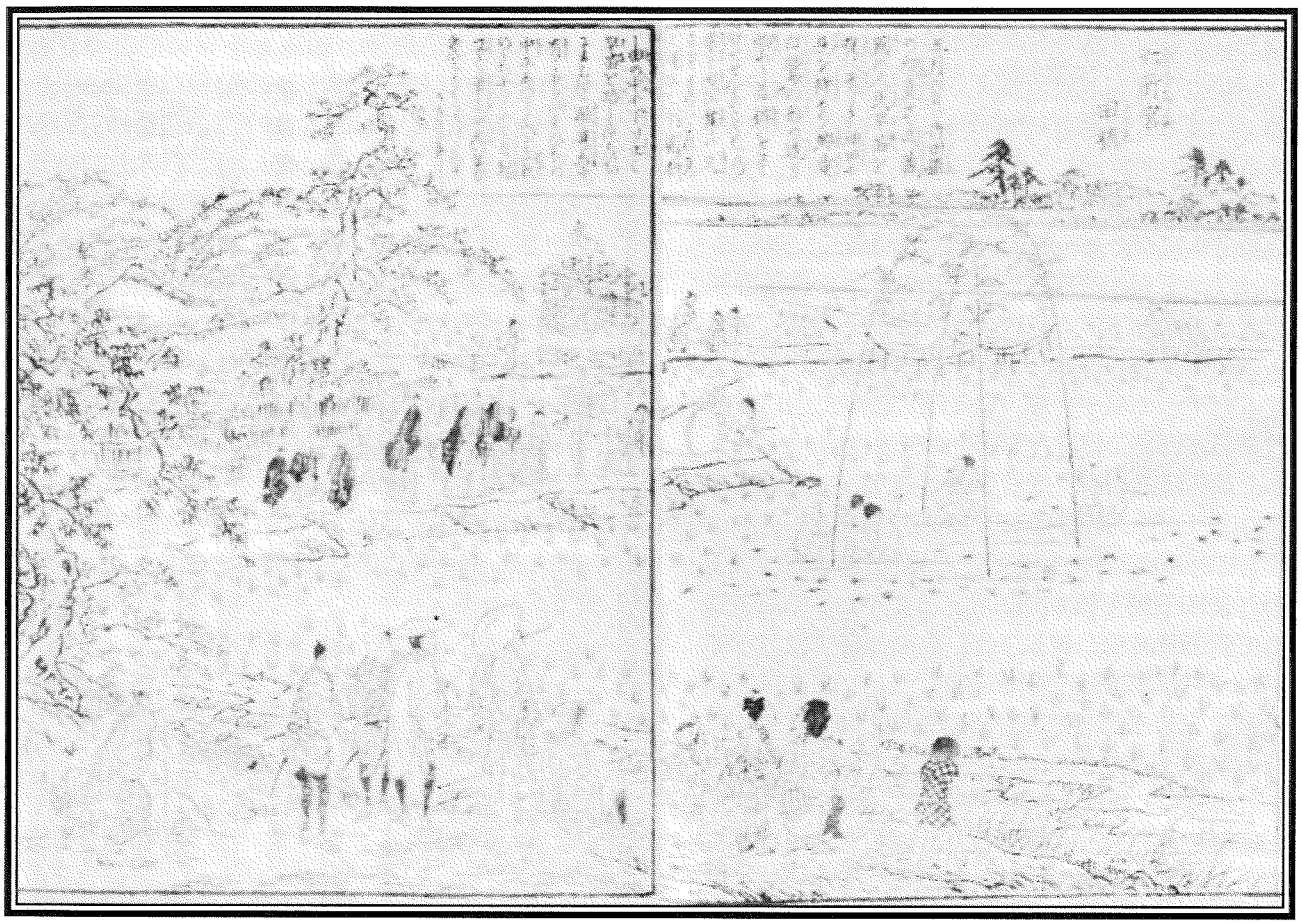
府中市誕生50周年
50th anniversary
SINCE 1954

あるむぜお68

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO.68　2004年6月20日



江戸名所図会より御田植え祭

目次

1-2 武蔵国のなかの「くらやみ祭」 ①御田植え祭
3 展示会への招待
昆虫写真家 栗林慧の世界　虫の目になりたい
4 民具発見 ⑤思い出、伝承なき民具を使い、整理する　～これは龍吐水？～
5 最近の発掘調査
古代国府の鋳物工房
6-7 ノート　SOS！野生動物
8 市制50年　府中の町並み変化
9 昨年度報告・新刊情報
10 たまRIVER WARS ⑤霞の中の野人

くらやみ祭

府中市宮町にある武蔵総社・大国魂神社（六所宮）の例大祭。毎年4月30日の品川沖での潮汲み神事に始まり、5月3日・4日の競馬、囃子・万灯・山車の競演と続く。5日夕刻がクライマックスとなる神輿渡御で、6張の太鼓に率いられた8基の神輿が御旅所に入る。神輿は翌早朝に神社に還る。夜中の神輿渡御が特色で、古代武蔵国府の祭の伝統を伝えている可能性が高い。

郷土の森博物館では、10月10日から11月23日、特別展「武蔵府中 くらやみ祭展」を開催予定

表紙：武蔵国のなかの「くらやみ祭」①御田植え祭

小野一之

盛大な「くらやみ祭」の最後を飾る行事として、かつては御田植え祭が行われていました。神輿が出た翌日の5月6日、武蔵の各地から農民が集まり、六所宮の御神田で田植えをしたそうです。その直後に子供が田に入り相撲をとるのですが、翌日には苗がピンと張っていたという話まで加わっています。その様子が、天保7年(1836)に刊行された『江戸名所図会』に挿絵入りで紹介されています（表紙）。

神職か氏子総代が集まる水田の脇では、一人の男が白鷺の付いた大きな蓋鉾を構え、傍らには太鼓が持ち込まれています。間もなく唄や踊りが始まるようですが、それを待ちきれずに、注連縄の飾られた水田では、早くも裸ん坊の子供たちが戯れ出してしまいました。見物人も三々五々集まってきたところです。

この御田植え祭の光景は、多摩地域の名所を8か所選んだ寛政9年(1797)刊行の『武埜八景』にも「六所挿秧」として出てきます。豊作祈願のため遠方から蓑笠姿の人がやって来て、魚が競うようにして田植えをするといった意味の題詩が挿画には付けられています。ちょっと異なる伝承が、慶応3年(1867)の『絵本江戸土産』にあります。少女17人が田植えをして、それから神輿を田の中に入れて荒らしたと書かれています。

こうした御田植え祭について、ここでは2つの問題を考えて見ることにしましょう。1つめは、どうして「くらやみ祭」に田植えの行事が加わっているのか、です。太鼓に先導された神輿が甲州街道の御旅所に入るという神輿渡御が中心となる祭礼のなかで、農村での田植えは一見して異質の存在に見えてしまいます。

武蔵総社の六所宮は、御本社と呼ばれる大国魂神を中心に、武蔵国内の6つの神社の祭神、怨霊神の御霊宮、合わせて8神を祀っています。この8神が1年に1度、それぞれの神輿に乗せられて夜中に御旅所に入るメイン・イベントは、そこで神々が新しい力を付けて生まれ変わって還ってくるという意味を持っています。これを国府の政治的支配といった視点から解釈すれば、国府を中心とした武蔵国内の宗教的・精神的結束を再確認し強化していく意義を持っていたというべきでしょう。そこに「くらやみ祭」の起源とされる国府における総社の祭の本質があったはずです。今のところ六所宮の祭の古い記録として確認できるのは室町時代ですが、他国の例からすれば、国府の祭は、各国で総社が誕生した平安時代末まで遡る可能性があります。

同じような視点で御田植え祭の意味を考えてみることができます。国府の役人である国司には、国内の農業を奨励する（勧農）という重要な職務があります。農民に与えられた口分田を整備し、農作業を励行し、豊穣を準備する。もって国内の農民は安泰で、国府の税収（租）は豊かになるという仕組みです。言ってみれば国府主催の農業振興祭といった意味を持っているのです。「くらやみ祭」における御田植え祭の存在は、けっして異質なものではなく、むしろ武蔵国府の祭としての由緒を伝えるものではないでしょうか。

次に、2つめの問題です。江戸時代の地誌が伝えるように、武蔵国中の農民が田植えをやりに府中に集まったと言う話はほんとうでしょうか。

この点を考える上でたいへん興味深い慣習が、埼玉県戸田地方の農村に残っていました。5月の前後は代掻きや田植えでたいへん忙しい時期なのですが、5月6日だけは、オロクショサマと呼んで、絶対に仕事を休まなければならなかった、もし約束を守らないと必ず怪我をすると言われていました。理由は、この日はオロクショサマという神様が田植えをする日で、そのためにみんな苗を持って出かけたからだと言います。オロクショサマというのはもちろん府中の六所宮のことです。戸田と府中の間は25kmほどですが、実際に府中まで出かけたことがあったかも知れません。

「くらやみ祭」の御田植え祭に武蔵国中から農民が集まったという表現はやや大げさですが、昔は神輿も6つの神社からやってきたという伝承とともに、注目すべきことです。たとえ地域が偏っているにせよ、模擬的な実施にせよ、農民と神輿の集結は、武蔵国府の大祭としての威容を、伝えるものと言えるでしょう。

そんな御田植え祭も、明治以降は行われなくなり、かつてあった御神田も、1933年にできた東京競馬場の敷地に変わりました。ところが、1990年、時期と場所を替えて復活しました。神社を境に市域の東西の水田が交互に選定され、農家と農協の協力、地元の子供たちの参加を得て、毎年続けられるようになりました。

現在の御田植え祭（1997年6月28日 府中市南町）

展示会案内

昆虫写真家 栗林 慧の世界
虫の目になりたい

～レンズが捕えた驚きの小宇宙～

7月17日（土）～8月31日（火）

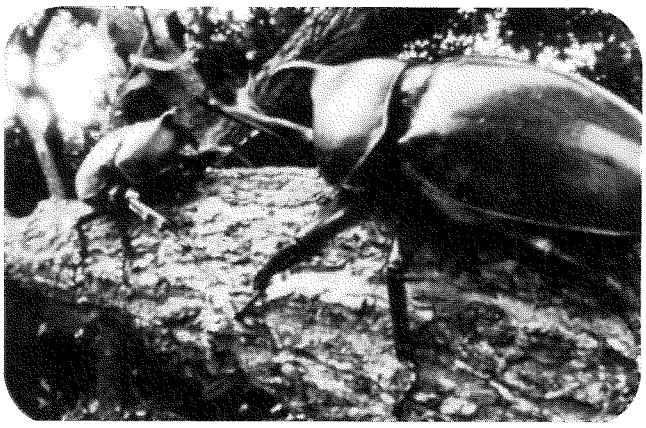
誰しも興味の対象となるものを見つめるとき、出来ればそれと全く同じレベルの視点で眺めてみたい、あるいはその世界に飛び込んで体感したいと思うものです。ちょっと昔の映画「ミクロの決死圏」では人体の中を、あるいは最近でも「インナースペース」や「ミクロキッズ」といった作品中、人間が小さくなる設定でそうした願望を描いて人気を博していました。

従来の昆虫写真では、どうしても人間の視点から捉えた画角で小さな生命を表現するといった方法しかなかったように思います。それはそれで、どんなに体は小さくとも地球上に生きる力強いエネルギーを我々に感じさせてくれるメッセージを伝え、自然界の不思議や驚異を私たちに教えてくれたものです。こうして考えると、昆虫というのは最も困難な被写体の一つと考えていいでしょう。その昆虫を３０年にわたって撮り続け、しかも過去にはなかった独創的な世界を表現した写真家による展示会がこの夏開催されます。その人の名は栗林慧さん、大好きなアリの写真だけは誰にも負けない決意で写真家になったという信念の人です。

何が独創的なのでしょうか？それは氏が独自に開発したカメラを駆使し、虫の目線から虫の世界を撮影した不思議な描写です。クローズアップの技術を磨いて小さな生き物たちからわずか５ミリの近さで撮影しても背景がぼけない特殊レンズによって、昆虫を今までの常識を覆す角度から捉えたのです。展示会は氏が開発した最新の超深度接写レンズ、アリの目カメラの成果を世に問う場でもあるのです。昆虫が好きで好きでたまらない情熱は、試行錯誤を繰り返してついに自身の湧き出るイマジネーションを実際の映像として写すことに成功しました。夢は叶ったということです。

本展ではこれら特徴ある写真を大型パネルに伸ばして迫力いっぱいでお届けします。

（中村武史）

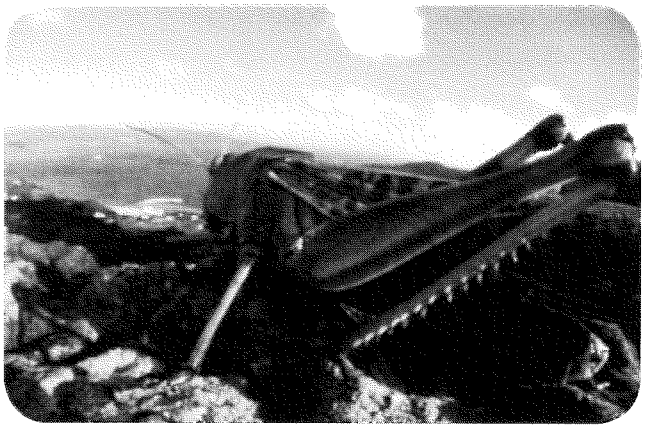


クヌギの幹上で出会った２匹のカブトムシ

栗林先生はかく語りき。。。

「自然が無ければ人間生きられないっていう実感があります。人間がこれほど自然を破壊し始めたのは、おそらく戦後のここ50年のことだと思います。それまで人間界は自然界と共にあったんですよ。あったものが無くなるっていうのは、人間の精神に影響しますよ。子供たちの世界にも色々な事件が起きていますが、自然離れが原因としてあるような気がします」

「例えば昆虫が身近にあればそれを相手にしますよね。中には残酷に虫を殺したりする子もいるでしょう。でも、その時何かいやな思いをするんです、悪いことしたなという感覚です。これが大切なんで、そこで加減っていうのを覚えるんですね。命っていうものを知るんですよ」



平戸島のトノサマバッタが
海と対岸と陸地を見つめていた

copyright© kuribayashi Satoshi

民具発見

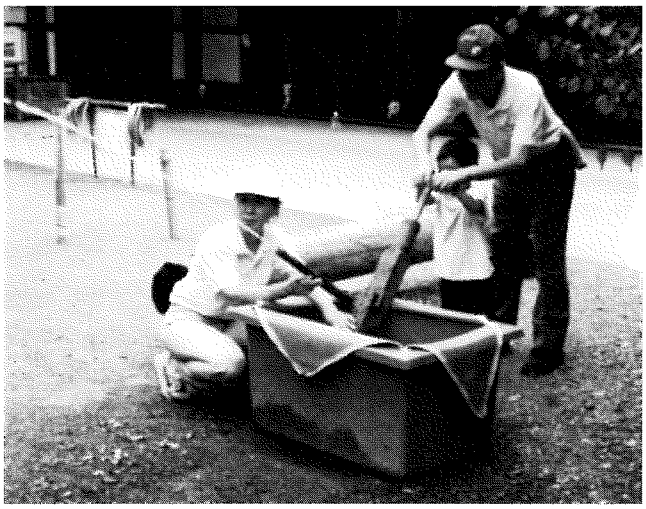
佐藤智敬

第五回　思い出、伝承なき民具を使い、整理する
～これは龍吐水？～

前回は、思い出、伝承なき民具をどのように見るかについて考えました。今回もそれにかかわる話です。

ある日、解体してしまう古民家から、いくつかの道具が博物館に寄贈されました。その中に、木製の、かさばる、なんともいえない形の器具らしきものがありました。他の道具類の種類から見て江戸時代のものがそのまま保管されていたのでしょう。寄贈者も使った記憶のないものでした。

それは木製の消防用手押しポンプでした。博物館では龍吐水（竜吐水）なる名で登録されています。放水するさまが、龍が水を吐くように見えるからその名があるといいます。消防組や裕福な家単位で所持していたようで、博物館にはかなりの数が寄贈されています。龍吐水は全国的に、江戸時代中ごろから明治 10 年代にかけて使用されてきましたが、さらに多くの水を出せる国産の腕用ポンプが量産されたことに伴って、明治 17（1884）年末に、公的な使用が廃止された道具です。使用の思い出がある人を探しようがありませんでした。



博物館ボランティアによる龍吐水（？）の放水実演

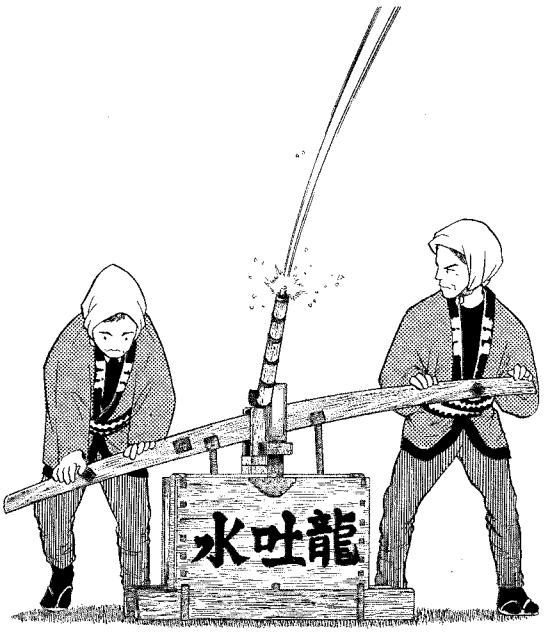
これがどんなものかを知るためには、実際に使ってみるのが一番。ということで、昨年の夏の特別展に合わせ同種の資料を用いて、その様子を再現してみました。桶に水を張りその中に入れ、上部の栓を押すとピューっと水が飛び出ます。せいぜい水道水を普通のホースで散水するのと同じくらいの勢いでしょうか。勢いよく燃える火焔を消すにはバケツリレーのほうが効率的かもしれません。実際、当時も消防手の半纏や纏を濡らすくらいにしか役立たなかったようです。

とはいえ、記憶、記録などの情報がほとんどなかった資料でも、その一部を使用し再現することで当時の生活の一端を知る手段となる例といえるでしょう。

ところで、これまで何の疑いもなく龍吐水という道具名を使用してきましたが、この名称、全国的なものではありません。調べてみると、他地域では、郷土の森博物館でいうところの龍吐水は「水鉄砲」として紹介、認識されている場合がほとんどなのです。もしかすると府中周辺でも龍吐水と呼ばれていなかった可能性もあるのです。

『府中市史』（下巻 p945）に裕福な家には、龍吐水がある、と記され『府中市史近代編資料集（五）』などにも「リュウドスイ」と解説のついた写真が載せられています。博物館に収蔵されているそれらについている銘を見ても、製作者として「龍吐水師」（東京神田のものが多い）と記されているものがあります。この道具が、府中でリュウドスイと呼ばれていた可能性はたしかに高い。

しかし、一般的に龍吐水とは、水の入る箱の上に、押し上げ式のポンプを取り付けたもの（イラスト参照）のことを言うそうです。そしてそれとは別に小型の木製手突きポンプ（水鉄砲）も竜吐水と呼ぶこともある、のだそうです。博物館にたくさんあるのは明らかに後者です。府中の消防の記録に「龍吐水」なる単語は出てきますが、それがどちらを指したのかは定かではありません。つまり、博物館に保管されている道具は実はリュウドスイでなく、水鉄砲である可能性もあるわけです。もちろん、結論としてはどちらでもまちがいではないのですが、各道具をそれぞれ何と呼んでいたかは今後もっと気をつけて調べなければいけません。てっきり日本全国でリュウドスイと呼ぶものだと先入観を持ってしまっていたことを反省した発見でした。

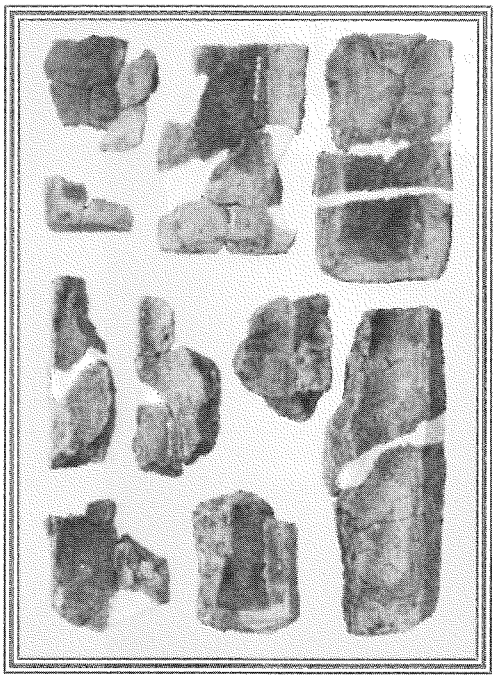


イラスト：砂川敦志

最近の発掘調査

古代国府の鋳物工房

宮町三丁目　府中市教育委員会　荒井　健治



鋳型の破片
上段の３点がＢ、下段がＡ。右下の長さ約 28cm。

今回は，発掘現場の最新成果ではなく，国府の中で鋳物の生産が行われていたことが判明したという，最新の整理成果について紹介します。

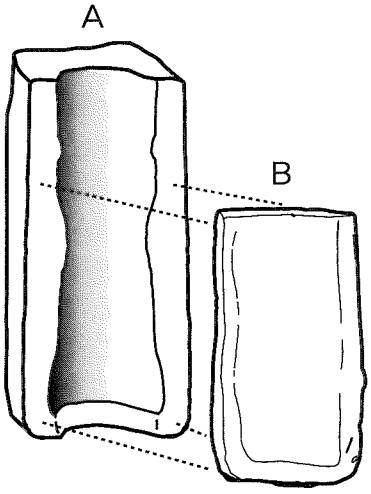
鋳物の生産が行われていたのは，大国魂神社南東側に位置する都営宮町三丁目アパート地区です。ここの 10 世紀後半頃の竪穴建物跡から，細かな砂を固めた土製品のような遺物が出土していましたが，今回これが鋳鉄製の獣脚を作るための鋳型であることが判明しました。

鋳型片は，模式図のＡのような，四角柱の一面がＵ字形に窪んだものやＢのような板状のもの，細かく壊れていて元の形が明らかでないものがありました。おそらく，獣脚が付く容器が生産されたのでしょうが，具体的な種類を明らかにすることはできませんでした。

武蔵国府内で，古代に鋳造生産が行われていたことが確認されたのは初めてです。埼玉県や福島県では報告されていますが，貴重な発見といえます。福島県の例をみますと，鉄生産に始まり鋳物生産まで，すなわち素材から製品生産までを一貫して行っています。おそらく鋳物生産については，素材である鉄が重く、多量の燃料（炭）を使うことから，一か所で生産を行い，製品を消費地に運搬したものと考えられます。

では，消費地である武蔵国府内で，なぜ鋳造生産が行われたのでしょうか。今回の獣脚は大型の部類に入りますから，かなり大きな製品を生産したものと考えられます。製品を運搬するには重すぎるため，素材で運んできて，国府内で鋳造したのではないのでしょうか。この特注品的な生産の仕方は，鋳型の破片が少なく，おそらく一点しか生産していないことからもうかがえます。また，一般的な鍋に付く獣脚の場合，上端の形状は尖っているのに対して，今回発見された獣脚は平らに作られていることから，底面が平坦な箱のような特殊な形状の容器が作られたものと想像されます。

最後に，誰の発注でどこに運ばれたかですが，北には国庁推定地が隣接しています。しかし，10 世紀の終わり頃から，国庁の影響下にある工房の解体が進み始めるとされることから，詳細については今後の研究に待ちたいと思います。



鋳型の模式図

NOTE

SOS！野生動物

中村武史

ダンボール箱に保護されたオオタカ幼鳥（警戒と緊張で、じっとこちらを睨んでいる）。

オオタカ幼鳥捕獲せり

当博物館のフィールドにたくさんの野鳥が確認されるようになってから随分と時間が経過しました。かつてこのコーナーで「野鳥の住む森」なる記事（No.26、1993年12月）を執筆しましたが、あれからさらに10年、ますます森は充実し、野鳥にとってもかなり条件の良い環境となっているようです。ここ数年は定例観察を行い、第一次報告データでは45種が確認されています（相馬尚教1998年、郷土の森紀要第11号）。博物館の南縁を流れる多摩川の影響も多分にありますが、渡り鳥の越冬地や中継地としても利用できる良好な環境であることはまちがいないようです。また、1999年7～9月にはコウライウグイスなる珍種も滞在し、写真家やマニアを騒がせたエピソードも本紙に掲載（No.52、2000年6月）しました。

そんな折、またまた昨年8月9日の朝、博物館園内のケヤキ並木で珍しい大型の野鳥を捕獲しました。捕獲といっても、トラップを仕掛けて故意に採集したわけではありません。その鳥は、早朝の巡回時に警備員さんが発見した時には飛べないくらいに弱っている状態でした。早速自然調査団の相馬先生に来てもらいましたが、どうやらオオタカの幼鳥であることがわかったのです。オオタカは猛禽類、タカ目タカ科に属し、渡り鳥ではありません。食物連鎖の頂点に位置する動物なので、元々その数は少なく、成鳥のオスでは、両方の羽を広げると100cmを越える大きさ、全長はおよそ50cmにも達します。また頭から背、尾、翼の上面が灰黒色、目の後ろは黒く眉斑は白で大変目立ちます。頭の後ろに白斑がでるものも多いようです。胸や腹なども白く、灰黒色の横斑が全体にあります。若鳥は背面が褐色で、下面には黒褐色の縦斑、尾には4本の黒っぽい帯があります。主にハト類、ムクドリ、ヒヨドリなどを空中で捕らえて食べています。

日本全国の平地から山地の森林で繁殖しており、北日本には、やや多く生息、秋や冬には、人里や農耕地の近くの林でも見ることができます。1993年の時点で、31都道府県から繁殖の情報（日本野鳥の会その他）を得ています。そして重要なことは、絶滅の危機に瀕している種であり、繁殖地などは一切口外しないことになっているという事実です。これはヒナの密猟など幼鳥の盗難を未然に防ぎ、貴重な種を保護するという観点からです。さらには環境庁自然保護局でイヌワシ・クマタカ・オオタカについての営巣状況や繁殖状況、行動圏の各調査も行っています。環境庁のレッドデータリストでは絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されており、絶滅の危険が増大している種に含まれます。また、国内希少野生動植物種にも指定されています。

今回の件は、推測ですが、巣立ち後の個体がカラスに襲われたのではないかと考えられ、そのため傷を負って動けなくなっていたのでしょう。速やかに鳥獣保護員に連絡、引き渡し後一週間で死亡した旨の連絡を受け、へい死鳥獣拾得届を東京都に提出した上で剥製標本にしました。言い方は不謹慎かも知れませんが、こんなことでもない限りオオタカの標本を収蔵する機会はなく、貴重な資料として今後は大切に保管していこうと思います。

溢れる絶滅危惧種

ところでレッドデータとは何でしょう？1966年、国際自然保護連合（IUCN）が、世界的規模で絶滅の恐れのある野生生物を選定し、その生育状況を解説した書籍を発行しました。この本のタイトルがレッドデータブックで、レッドとは万国共通の危険信号、例えばレッドカードやレッドゾーンなどといった用語のイメージと同様の意味です。あえて翻訳すれば、「危機的状況にある生物の本」と理解してもらっていいでしょう。これは、順次改訂版が発行されていて、いくつかの国からはその国内のレッドデータブックも発行されています。日本でも1991年に「日本の絶滅のおそれのある野生生物」というタイトルで環境庁（現在の環境省）が作成し、2000年からはその改訂版が、植物や動物の大きなグループごとに順次発行されています。様々な人間活動が原因で起こる野生生物の絶滅を防ぐ第一歩として、現状でどのような生物が絶滅の危機に瀕しているのかを把握し、そしてより多くの人々に認知してもらうためにもレッドデータブックの作成は大変重要な意味を持つのです。

そもそも野生生物は、なぜ絶滅への道を辿るのでしょう？地球上に生命が誕生しておよそ35億年とも40億年ともいわれています。永いその進化の過程において、あらゆる環境下であらゆる大きさや形の、つまりは多種多様な生物が生まれ、生活するようになりました。その節目においては、恐竜のように絶滅して地上から姿を消してしまった種もいます。

自然史の経過の中で絶滅することもまた自然のプロセスと言えるようです。ところが今日の絶滅は、こうしたものとはまったく異なるものです。人間によって行われる森林伐採や埋め立てなどの開発による生息地の破壊と消失、農薬などによる環境汚染、毛皮や牙、羽毛、そしてペットや鑑賞を目的とした乱獲、本来そこに生息しなかった生物を持ち込んだことによる圧迫や侵略、数え上げたらきりがないほどに、様々な影響によって、かつてない速さと規模で絶滅が進攻しているのです。これらの原因が単独、あるいは重複して起こった結果、野生動物からのSOSが発信される状況をつくりだしています。

生物多様性を守れ！

それも自然の摂理と考え、滅びるものは自然淘汰ということで‥‥なんて大きな間違いです。ではなぜ種の多様性を守る必要があるのでしょう？野生生物は、それぞれ異なった生息環境と結びついています。先ほども述べたようにいろいろな生物が生息するということは、それだけ様々な環境が存在するということです。生物を分類する上で、その最小単位かつ最も基本的な単位を「種」と呼びますが、ヒトも含めて地球上のさまざまな生物は、それぞれ独立した種であり、あらゆる環境と結びついて生態系をつくりだしています。つまりは複数の種で構成される生態系のパターンは相当豊富にあり、これを生物多様性と呼んでいるのです。生物多様性を生み出すそれぞれの種は、おのおの固有の役割を持ち、ひとつの種は他の種とつながりを保ちながら生きています。従って環境基盤とは、種と種の複雑かつ微妙なバランスの上に成立するものなのです。

たった1種の絶滅というなかれ！小さな水漏れが、やがて穴を突き破り大水を噴出させるように、やがてはその生態系全体を崩してしまうことにもなりかねません。ある種がいったん絶滅すれば、人間の手で再生させることは不可能です。人間活動が原因で多くの種が地球上から失われるとすれば、生物多様性は大きく損なわれてしまうでしょう。ひいては人類の生存基盤はおろか、全生物の存続に影響を与える結果につながるのです。

「生物多様性保全条約」審議風景　1992.6. ブラジル
（週間朝日百科　動物たちの地球 139　朝日新聞社刊　1994　より）

1992年、ブラジルのリオデジャネイロで結ばれた生物多様性条約はまさにこの危機を認識し、地球上のあらゆる生態系を守るため、ひいては人間が生きていくための環境維持を世界に向けて発信させたものでした。但し、あくまで各国の関心は、利用可能な生物資源として多様な生き物を確保しなければならないという考え方であり、どこまで純粋なものであったかは疑問です。頭では理解しながらも、人間はその欲望優先の道を選択せずにはいられない運命なのかもしれません。ならば、このままヒトという種が仮に絶滅を迎えるのだとすれば、過去の恐竜よろしく自然史の一プロセスとして片付けられてしまうのでしょうか？

数少ない稀少動物が偶然とはいえ訪れるまでになった郷土の森博物館、でもそんな貴重種が、あえて言い切ってしまえばカラスごときに襲われて命を落とす現実。都市でカラスが頂点に君臨する生態構造を作り上げたのも誰あろう人間に他ならないのです。郷土の森は未来永劫、野鳥にやさしい環境を維持していきたいものですが‥‥

市制50年　府中の町並み変化

一枚の地図から

今年は府中市制50周年にあたります。当時と今で府中の町並みはどのくらい変わったのでしょうか。

黄色の地色に水色やみどり色で、絵本の様な描き方のこの地図（部分）、昭和29年（1954）8月発行で、題は「府中市観光案内図」とあります。府中町とそれをはさんだ東側の多磨村と西側の西府村とが合併して府中市が生まれたのが同じ年の4月でしたから、これはおそらく府中市最初の観光案内図ということになるでしょう。

南の多摩川を渡って西方へ延びている鉄道は南武線ですから、これは現在でも同じですね。北からまっすぐ下りてきて多摩川の近くで二叉に分かれているのは下河原線です。この頃は人を乗せる電車になっていましたが、元々は東京に川砂利を運ぶために国分寺で中央線と結ばれていました。

この路線は、昭和48年（1973）からは武蔵野線として踏襲され、東京の第2環状線の役を果たしていますが、府中の中心部は地下化されているので、地上の線路は無くなっています。現在の下河原緑道は元の線路の跡です。

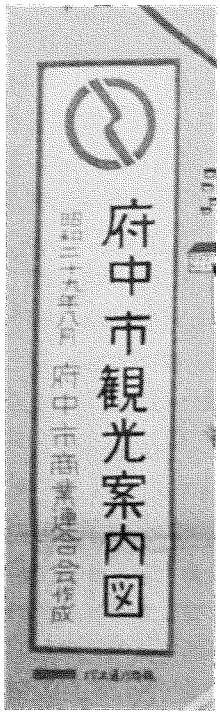
競馬場、大国魂神社と北上し、とても今のビル街とは程遠い家屋の並ぶ旧甲州街道を横切って、ケヤキ並木に沿ってみても、大きく描かれているのは、警察署くらいです。その西裏にある府中市役所は合併前の府中町役場が改名されたもの。現在では郷土の森博物館に移築されている建物です。

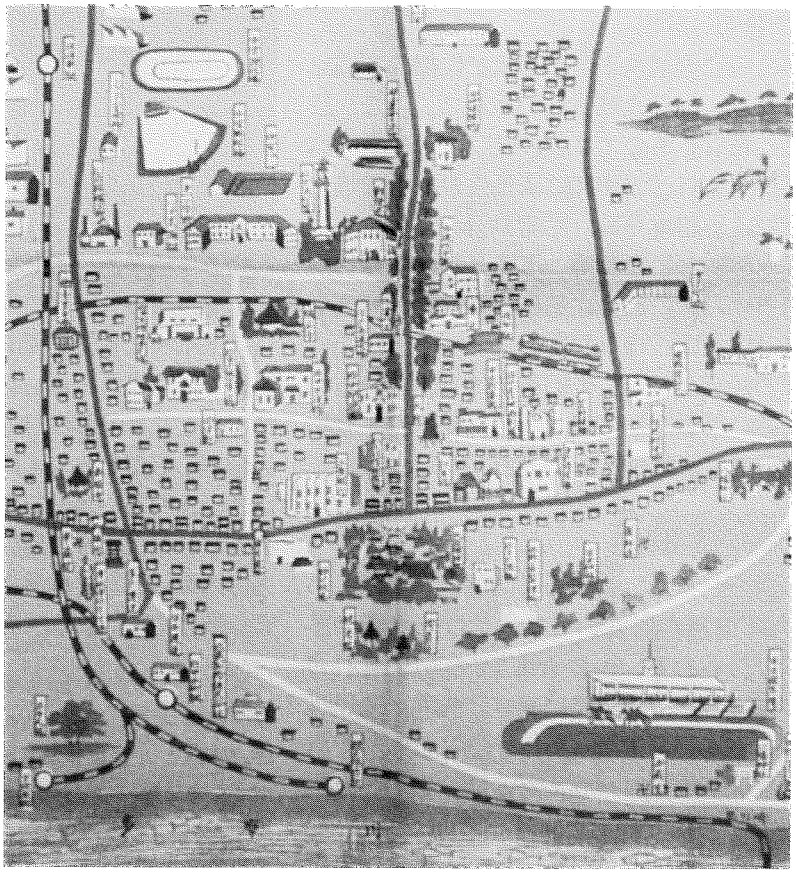
京王線の電車も2両で走っています。まるでお伽の国の電車のようです。実際にもこの頃はまだチョコレート色の車輌で短いものでした。

その北側にあるコの字形の大きな建物は第一小学校ですが、前を通っているはずの新甲州街道が、あれっ、ケヤキ並木の東側はうっすらとしか描かれていません。当時〔甲州街道バイパス〕と呼ばれていたこの新道が、東府中―本宿間で開通するのは昭和31年（1956）のことです。京王線に続いて、ケヤキ並木を分断するような道路は造るな、という反対運動もありましたが、大きな声にはなりませんでした。

市政施行後50年間は、自動車急増の時代でもあり、町の顔が変わったとすれば、車社会に対応せざるを得なかったためでもありました。

（馬場治子）





「府中市観光案内図」（府中市立図書館　渡辺文庫より）

平成１５年度寄贈資料一覧

	寄贈者	資料名	分類	数量
1	須藤美登里	シール（玩具）	民俗	1点
2	桑田健一	記念盆・酒作り道具ほか	民俗	1括
3	矢島　中	薪割り	民俗	1点
4	林　　繁	やかん・一斗枡・練炭火鉢	民俗	3点
5	山本　豊	ねこ炬燵・おろし器・棒ばかり	民俗	4点
6	舟見紘一	徴兵保険証書	民俗	2点
7	あさひ苑	大工道具	民俗	1式
8	田代広一	屋根葺き道具ほか	民俗	3点
9	内藤忠男	餅作り用具	民俗	5点
10	中田豊作	鍬ほか	民俗	7点
11	淡谷正一	押し雛人形	民俗	1点
12	小川洋子	鏡台	民俗	1点
13	大室智夫	大祭関係資料	民俗	1括
14	岩崎正五郎	大祭関係資料	民俗	4点
15	矢島　中	矢島家文書（追加分）	歴史	1括
16	矢島　中	刀箱（英文銘あり）	歴史	1点
17	高田保幸	大久保清家文書	歴史	1括
18	榎本宗平	多磨尋常小学校卒業写真	村野四郎	1点
19	榎本宗平	榎本武次郎宛年賀状	村野四郎	1点
20	東京都	村野四郎原稿「日本詩の展開」	村野四郎	1点
21	東京都	村野四郎関係著書	村野四郎	3点
22	田中将貴	三国新羅壺	考古	1点
23	玉木　直	展翅済昆虫標本（海外種）	自然	1括

「あるむぜお」は
定期購読ができます！！

春夏秋冬、季節ごとに発行している「あるむぜお」の送付ご希望の方は、4回分の送料320円（切手でも可）を添えて、本館1階の受付カウンターでお申し込みください。

平成１５年度利用状況

（H15.4.1～H16.3.31）　　単位：人

区　分		有料 一般	有料 団体	減免（障害者等）	合計
博物館観覧者 開館日数308	大人	184,864	11,169	24,146	220,179
	子供	33,610	28,458	29,007	91,075
小　計		218,474	39,627	53,153	311,254
プラネタリウム観覧者 投影日数295	大人	18,167	2,479	3,846	24,492
	子供	9,917	13,847	2,473	26,237
小　計		28,084	16,326	6,319	50,729
合　計		246,558	55,953	59,472	361,983

新刊紹介

・府中市郷土の森博物館紀要第17号　（600円）

府中新宿菊池家文書にみる屋号・商人名
（博物館ボランティア古文書整理班）

槌打つ響き、最終章脱
－府中市内「鍛冶屋小屋」の調査記録－
（博物館ボランティア資料整理班＆佐藤智敬）

民具が博物館に入るとき
－2002年度の資料受入れ調書から－（小野一之）

「多西郡」在銘の島根県大田南八幡宮奉経筒
（深澤靖幸）

武蔵国の源頼義・義家伝説
―源頼朝伝説との比較もかねて－（佐藤智敬）

・府中市内家分け古文書目録7
大国魂神社文書目録（1）　（400円）

・平成14年度府中市郷土の森博物館年報
（400円）

・府中市郷土の森博物館　常設展ガイドブック
（400円）

郷土府中の考古・歴史・民俗・自然に関する資料がズラリと並ぶ常設展。ちょっとわかりにくい所はこの一冊でバッチリ！今回新しく生まれ変わった解説書は、小中学生向けに書き下ろした明快な内容になっています。読み物としてもどうぞ。

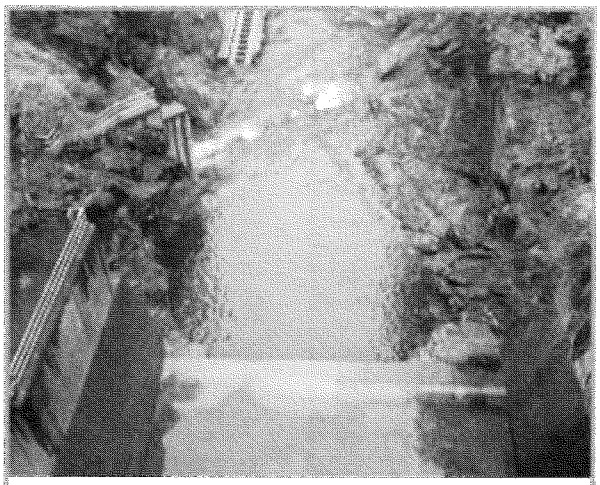
たま RIVER WARS

⑤霞の中の野人

中村武史

奥多摩湖を出発して、一行は白丸ダムを目指す。まだまだ上流域特有の険しい景観が続くものの、やっとこさ全員揃ってのイカダ下りは順風満帆、惣岳渓谷を軽快に突き進んでいった。有史以来繰り返されてきた洪水と、江戸時代の寛保2年（1742）や明治40年（1907）に奥多摩一帯を襲った大水害などの影響で、谷から多数の巨岩が多摩川に押し出され、深く切り立つ男性的な渓谷美が造りだされていた。かつて多摩川を使って木材を江戸まで流していた時代にも、このあたりは一番の難所とされ、奥多摩の木を切り出していた杣職人による木やり唄にも厳しい様子が表現されているという。両脇から迫る深緑と、岩を食む水の流れが醸し出す清涼感がことのほか心地良かった。そう、季節は夏真っ盛りなのである。

昨日とは打って変わって精神的余裕に包まれた川下りは、頭を整理するには絶好の環境と時間をハニーに与えていた「…何でこんなことになっちゃったのかしら。水源林で脈絡のない話を聞かされて‥そう、しかも多摩川の源流神？うそみたい‥でも確かに4人とも遭遇したのよね…気がついたらエノキンがいなくなって‥イカダに乗ってて‥石礫が降って来て‥奥多摩湖に着いて…エノキンたらグッドタイミングで再登場したわよね‥テントも寝袋も用意してて‥待って？借りたテントと寝袋そのままにしてきちゃったけどよかったのかしら‥でもボーイスカウトの友達とそういう約束になっているからって…ずいぶん奉仕的な友達よね、しかも急なお願いで4人分の寝袋と食料なんて‥エノキンだからそのくらい顔は広いか…それはそうと本当に私たちの家族に連絡したんだろうか？？…そうだ！よく考えたら私たちが身をもって体験したのは、あの老人からメッセージを受けたことだけ‥イカダとか投石とかは現実だけど‥そうよ、全部が人の話！エノキンとか釣り人とか…私たちは追ってるサルの姿さえただの一度だって見てないじゃない！」



白丸ダム上部より下流をのぞむ（左岸部には魚道が見える）

考え込めば考え込むほどに疑惑は膨らむ一方であった。考え疲れた挙句の果ては、だからどうした！と、結局そこに逃げ着いてしまう。「…エノキンはこの先の白丸ダムでサルを捕獲すると宣言したじゃない。少なくともいよいよターゲットが姿を現わす確率は高いのよ。誰一人怪我したわけでもないし、むしろこの冒険はみんなを強くしている‥セイコなんか特に‥被害というなら筋合いのないこんな追跡ごっこをやらされるはめになったことだわ。その点ではエノキンだって被害者なのだから疑ったら気の毒ね…」「よーし、着いたぞ、白丸ダムだ！」タウエの一言で我に返ったハニーの瞳にダムのてっぺんが映った。

イカダを岸に着け、4人は円陣を組んだ。鋭い眼差しでエノキンが口を開いた。「出発の時に話したけど、ヤツらはこの近辺で釣り人の邪魔をしたり、ほら、そこの魚道を遡る魚を襲ったりしているという情報をつかんだ。俺はこの場所でボスザルを捕まえたい、って言うかここで終りにしたいんだ。だからみんなのチームプレーが必要になる‥分かるね」「私たちはこのダムの上で待つのね、ネットを広げて」少々逞しくなったセイコが発言する。「そうだ、俺はダムの下で待機する。ヤツが出現して良い位置に来たら合図するから一斉にネットを離してくれ。もがいているサルを押さえ込めば一件落着さ」高ぶる気持ちで同意しながらも、もはやクセになってしまったのか、ハニーは再び新たな疑問を心の中で唱えていた。「大体、こんなネットどこから持って来たんだろう？」

さて、あたりには釣り人さえ見かけることもなく、何だか妙に静まり返っていた。息を殺してダムの上にタウエ・ハニー・セイコの3人、下方岸辺の林に隠れてエノキンがその時をじっと待つ。4人にはたった1分が1時間にも感じられた。…傍らで何か大きな岩でも川に落ちたかのような音がした。その音は短い間をおいて数回聞こえてきた。ついにサル軍団のお出ましか？「…おい、何だ？」タウエが信じられないと言った口調で囁く。確かにどうなっているのか、あたりはみるみる霞に包まれてしまったのだ。早朝の川面に朝霞が発生することは珍しくないが、今は真昼なのである。川の意思によって操られているかのごとく、生き物のように霞は広がっていった。…それは、我々が認識している一般的なニホンザルよりもはるかに巨大だった。4人は霞の中に動く、もはやサルとは呼べない規格のサル、いや、野人を見た。現代の雪男？じゃなくて川男？こんな生物は図鑑でも見たことはない。多摩川源流神の暗黒面は、こんな化け物まで創り出す力があるのだろうか。全員が困惑していた、というよりは呆然と体を硬直させているばかりであった。驚きは冷静さを欠くものだが、寸の定、入念に打ち合わせたタイミングにも微妙な誤差が生じていた。視近距離で見ていたエノキンの心中も察するに余りある。平静ではいられなかったのだろう、一向に合図が来ないまま数分が経過したが…「今だ！」エノキンの絶叫が渓谷に轟いた。

つづく

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.68　発行日 2004/6/20
編集・発行（財）府中文化振興財団　府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町 6-32　TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/